

# 『古寺巡礼』と 青年将校

井上 廣司 陸自72

先日、指揮幕僚課程（CGS）の同期生会で奈良を訪れた。その時夜の懇親会で最初に話題になったのが、和辻哲郎著の『古寺巡礼』であった。

実は、CGSの学生時代の学校長が戦術・戦略の大家と言われ、学生から竹中半兵衛と呼ばれていた竹中陸将であった。その竹中学校長が、ある時学生に対して『古寺巡礼』の話をされたことがあった。どのような講話の形式であったかは定かではないが、ぐるりと囲んだ学生に対して、話しかけるように言葉を繋ぎ、眼に涙を浮かべておられたような記憶がある。

話の中では、仲間が倒れた時、若き将校の図のうの中に和辻哲郎の『古寺巡礼』が入っていた。その時、気になったのが、『古寺巡礼』を持っていたのが一人ではなかったということである。戦地に向かうにあたって、何か、大事なもののなかから高張らないものを持っていく心は理解できるが、なぜそれが『古寺巡礼』なのか、理解できず、心の中に疑問符が残った。

その後、2度ばかり『古寺巡礼』を読んでみたが、何故『古寺巡礼』なの

か、疑問符が消えることはなかった。

今回の同期生会での議論の中心は、この疑問符への回答であった。同期生全員が、この疑問符の回答を求めて『古寺巡礼』に立ち向かったようだが、誰も回答を見つけられなかった。

この『古寺巡礼』は、今から丁度100年前、大正7年の5月、和辻哲郎が友人と共に奈良の古寺を訪ねた時の印象を書いたもので、翌年に初版が出版された。その後何度も版を重ねたが、昭和13年頃に、周りから改訂すべきではないかとの機運が高まり、和辻自身もその準備を進めていたが、社会の情勢の変化の中、重版しない方がよいとの示唆を受け、絶版となった。

ただ、戦後昭和21年、新たに改訂版を出した時「改版序」の中で、和辻哲郎は、「絶版になっていた間」思いもかけないほどの方々からこの書に対する要求に接した。写したいからしばらく借してくれという交渉も一、二にとどまらなかつた。近く出征する身で生還は難しい、ついでに一期の思い出に奈良を訪れるからぜひあの書を手に入りたい、という申し入れもかなりの数に達した。この書を恥ずかしく思っている著者としては、全く途方に暮れざるを得なかつた。かほどまでにこの書が愛されるということは著者としてありがたいが、しかし一体それは何ゆえ

であろうか」と驚きを書いている。

そして和辻哲郎は、疑問符の答えとして「この書は時勢遅れになっていくはずなのである。にもかかわらずなおこの書が要求されるのが何ゆえであろうか。それを考えめぐらしているうちにふと思いついたのは、この書のうちに今の著者がもはや持つていないもの、すなわち若さや情熱があるということであった」と述べている。

「奈良坂を越えるともう光景が一変する。道は小山の中腹を通るのだが、その山が薄赤い砂土のきわめて瘦せた感じのもので、幹の色の美しいヒヨロヒヨロした赤松のほかにはほとんど木の肌を覆い切れない程度で、斑に山にしがみついているのである。そうしてその斑の間には今一面につつじの花が咲き乱れている。この景色は、三笠山やその南の大和の山々とはよほど感じが違う。しかしその乾いた、砂山めいた、はげ山の気分は、わたくしには親しいものであった。こういう所では子供でも峰伝いに自由に遊び回れる。ちよど今ごろは柏餅に使う柏の若葉を、それが足りない時には焼餅薑薇のすべすべした円い葉を、集めて歩く季節である。つつじの花の桃色や薄紫も、にぎやかなお祭りらしい心持ちに子供を浮き立たせるであろう。谷川へ下りて水いたずらをしてもう寒くはない。ジイジイ蝉の声が何となく心細さをさそうまで、子供たちは山に融け入ったようになって遊ぶ。この途中の感じが浄瑠璃寺へついでからもわたくしの心に妙にはたらいていた」

若き将校たちは、和辻哲郎の若き溢れる情熱を感じたであろうことも否定しないが、それ以上に『古寺巡礼』の中に、命を懸けて守ろうとしている日本を見た、あるいは見ようとしたのではないだろうかと思う。日本文化の歴史から見れば、京都であり、遡れば奈良の平城京、藤原京へと繋がっていくのである。その情景が、日本人としての心に繋がりに、時に自らの故郷の情景に繋がっていったのではないだろうか。

そんな風に思わせる『古寺巡礼』の一部分を紹介してみる。

いまだに疑問符のままである。これからも『古寺巡礼』を開くことになりそうだが、一度旧軍の先輩に感想を聞いてみたいものである。